

---

# 強くてニューゲーム

春風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

強くてニューゲーム

### 【Nコード】

N9921J

### 【作者名】

春風

### 【あらすじ】

歪んだ空間、吸い込まれた先は

空間を越えた？ いやいや実は……（前書き）

#### 注意事項

作者の知識のほとんどは二次創作で得た知識な上に、独自解釈等により、原作からかなり乖離した設定、話になる可能性が高いです  
オリ主とのカップリングがあります

主人公が最強、チート

空間を越えた？ いやいや実は……

いつものように仕事からの帰り道を歩いている最中に、それは目の前に現れた

「何だこれ？」

目の前にある歪んでいる空間を見て、思わず心に浮かんだ言葉が口から出る

『後ろから見ても……やっぱり一緒か』

前後左右から見ても、やはりそこだけが歪んでいる

「普通なら無視して帰るべきだが、気になるからには確かめるべきだと思うんだ」

驚きすぎて思考回路がおかしくなっているのがはつきりと自覚できる

「って、俺は誰に言い訳してるんだよ」

自分にツツコミをいれながら、目の前の歪んだ空間に手を伸ばした瞬間

「何いいいいい……………」

その空間に吸い込まれた

「iiiiiiiiiiたあっ！」

吸い込まれたと思ったらいきなり地面に叩き付けられた

「痛いやんけ!!」

思わず怒鳴りながら顔を上げると……

「……………ここ何処？」

目の前には全く見たことが無い空間が広がっていた

「見たこと無い木とか草がある……空間飛び越えて外国にでも来たのか？」

ズシン

暫く呆けていると後ろの方で地響きが起きた

「何事や……………」

何事かと思い後ろを見て固まった

「そんなアホな……………」

そこにあつたのは子供の頃に図鑑でよく見た姿

「きよ…恐竜？」

恐竜がいた

「何で恐竜がいてるんだよ——！！！！！！！！」

ゲーム好きの21歳独身男性、しまなか島中 ふみや文也の心からの叫びが響き渡った

手に入れた能力は……（前書き）

主人公の能力の説明になります

原作キャラが出るまで少しお待ち下さい

手に入れた能力は……

この時代やってきて50年程経った頃……

「ぬおおおおお!!」

恐竜から逃げ回っていた

この50年程で判明した事がいくつかあった

一つ目は、自身が死なない事。いや、正確には死ぬのだが、死ぬ度に15、6の頃の肉体で生き返るのだ

二つ目は、いくらでも強くなれるという事。鍛えてから死ぬと、生き返った時に見た目は15の肉体だが、力や持久力等は死ぬ前と同じだけある上に、そこからまた同じだけ鍛える事が出来た。この能力を好きなRPGとSTGからパクって強くてニューゲームする程度の能力と名付けた………もはや程度じゃ済まない気もするが、やっていたSTGのキャラの能力も程度じゃ済まない物があつたので、気にしない事にした

三つ目は、この世界が元の世界とは少しばかり違うという事。なんと、恐竜の一部が火を吐いていたのだが、俺の知っていた知識では火を吐く恐竜なんてのはいなかったはずだ………もしかしたら化石からはわからなかっただけかもしれないが



四つ目は、不幸な事に俺が恐竜の補食対象に入ってる事だ。初めて遭遇した10mはある肉食竜に、逃げる暇も無く喰われた時は最悪だった。おかげで恐竜の糞から生き返る羽目になったからな

まあ、判った事はこれぐらいだろうか？

まあ、頑張つて人間が現れるまで鍛え続ける事にしよう………神だと崇められる程度まで鍛えれば、一生飯に困る事も無くなるだろうしな

手に入れた能力は……（後書き）

能力としては、死ぬ度に15歳の肉体からの限界を上乗せしていく感じですよ

15の肉体が50、限界値を100とした場合は50の鍛える余地があるので、限界まで鍛えて死んだ場合、生き返った肉体が100、限界値が150となるわけです  
分かりにくい説明ですみません

## 崩壊寸前……自決？（前書き）

注意！

話が短い上に一気に時間が進みます（しかしまだ恐竜の時代）、  
一  
気に主人公が強くなりますが、修業風景等が省かれています

崩壊寸前……自決？

どうやら、俺の考えは甘かった。俺は孤独と退屈という物を甘く見すぎていたらしい

この世界に来てから、数千か、数万年の月日が流れた頃、俺の精神は壊れる寸前だった

最初の百年程は恐竜から逃げ続けていた。何回も死ぬ内に、死ぬ度に体に耐性がついてる事に気付いたが、死ぬまでの時間が伸びるだけで余計に辛いだけだった

二百年経った頃、どんな恐竜からも逃げ切れるようになったので、本格的に体を鍛え始めた。どう鍛えれば良いのか分からないので、漫画で見た鍛え方をすると、訓練で何度も死ぬ羽目になった

五百年が経った時、漫画とかでいう気を使えるようになり、恐竜を素手で倒せるようになった。一般人が気を使えるようになるには、数百年の時間がいるのかと笑ったが、一人で笑っても虚しいだけだった

千年が経ち、気を使わなくても恐竜が倒せるようになり、殺される事が無くなった。この頃から月日を数える事を止めた。数える程に、孤独感が募るだけだったから

そして今、孤独に耐え切れず、死ぬ為に火山の火口に来ていた

おそらく、百年もしない内に俺の精神は壊れるだろう。その前に思考を放棄する事にした

マグマの中に落ちても、いずれ耐性がついて生き返るだろうが、その為には途方も無い年月が必要となるはずだから、生き返る頃には人間がいてもおかしくは無いだろう

俺はそこで考える事を止め、熱く煮えたぎるマグマへとその身を投げ出した

崩壊寸前……自決？（後書き）

次話から原作キャラが出ます  
一話一話も長くなる予定です

ちなみに主人公の精神は弱いどころか、人間としては異常なまでに  
強いです。普通なら2、3回死んだ時点で発狂してます。

## 初めての出会い（前書き）

原作キャラとの出会いになります

これから先は、キャラ崩壊等には十分に気をつけて下さい

## 初めての出会い

どれほどの月日が流れたのだろうか？

そんな事を考える俺は、凍りながら空を落下していた

こんな事になった理由は

遡る事30分程

マグマの熱に体が耐性を持ち、意識が覚醒したと同時に体の内と外を焼かれながら、息が出来なくて窒息死という事を数百回繰り返した時、急に俺の体が押し上げられ、数秒後に吹き飛ばされた

「噴火に巻き込まれたのか」

状況を認識してそう呟く俺の体は音速を超える速度で高度を上昇させていった

5分程で上昇は終わったが、その頃には余りの冷たさに俺の体は凍っていた

俺の体は凍ったままで、次は下降を始めた

そして冒頭に続く訳だが、そんな絶賛落下中の俺の目には不思議な光景が写っていた



あの黒いのは何だ？

俺の目に写ったのは黒い空間　例えるならば、そこだけが夜であるような　　が四方数キロに広がっている光景だった

すっごい嫌な予感がするんだけど

そんな俺の予感とは裏腹に、俺の体はその空間目掛けて落下していく  
そしてその空間に体が入った瞬間、体は優しく受け止められ、次の瞬間飲み込まれた

いつものように生き返ると、黒い空間は消え、かわりに黒い服を着た金髪の少女がいた

「君、誰？」

「日本語が通じるはずがな」「私に名前は無いわ」「通じたし！」

ん？名前が無い？

「名前が無いってどういう事だ？」

「だって私が生まれたのはついさっきだもの」

「は？」

「さっきまでの私は、人の闇への恐怖、安らぎ等を含んだ闇の集合体に過ぎなかった。そこへ、落下してきた貴方を取り込んだ事によって、知性とこの体を手にしたのよ。取り込んだ貴方が目の前に現れた時はすごく驚いたわ」

つまり彼女はさっきの黒い空間そのものだって訳か……うん？俺を取り込んで知性を得たって事は……

「どんな知識が有るんだ？」

「貴方の知る常識と同じ程度の事が解るわ。あとこの世界の常識もね」

「この世界の常識って言うところをみると」

「もちろん貴方が別の世界から来た事も知ってるわ」

「それなら話は早い。俺にこの世界の常識を教えてくれ」

「ええ、いいわよ。知性と姿を得られたのは貴方のおかげだし、別にやることもないしね」

ありがたい、これで現在がどんな状態か認識出来る

「すまない、助かる」

「その代わりと言ってはなんだけど、私に名前をくれないかしら？  
いうなれば、半分貴方が親みたいなものだし」

名前か……闇の集合体って言ってたし、闇っていったらあのゲームのあのキャラの名前ぐらいしか出て来ないな。名前考えるにも、知り合いにセンス無いって言われてたし……うん、あの名前いいや

「ならルーミアっていう名前はどうか？」

「ルーミアか……ええ、響きが気に入ったわ」

「気に入ってもらえて何よりだ。さて、改めて自己紹介といこうか。俺の名前は文也、死ぬ度に若返って生き返る能力を持つてる人間だ」

「ある意味凄まじい能力ね……人間と呼べるのかしら？」

「体のつくりは間違えなく人間だよ」

「まあいいわ。私はルーミア、闇を支配する能力をもつ……貴方の常識でいう妖ね<sup>あやし</sup>」

「しばらくの間よろしくな」

「ええ、よろしく」

これが長い間一緒に旅を続ける事になる相棒との出会い。そして、

俺が出会った初めての東方project原作キャラとの出会い

## 初めての出会い（後書き）

自己解釈第一弾になります

ちなみにルーミアの言う主人公の常識はこの日本の常識とほぼ同じ  
と思って下さい

ルーミアが主人公が今いる世界の常識を持っているのは、人が闇に  
持つ怖れと同時に多少の知識も集まっていた為です

龍……二人目？前編（前書き）

前編と後編に分かれてますが、長い訳じゃなくて、一話を長くかけない私の未熟さのせいです  
一話一話が短くてすみません

## 龍……二人目？前編

ルーミアから聞いた話によると、この世界の地形と俺の世界の地形が一つを除いて非常に似ているらしい（ちなみに日本にあたる場所は、縄みtainなのでつけた文様の土器を使っていたので、記憶が正しければ現在は縄文時代で、歴史が俺の世界と同じなら、現代の16000～3000年前の間になるはず）

他にも神が何柱が生まれてたり等、情報をいくつか教えてもらった  
今は、俺の世界とは明らかに違うという場所に向かっていたのだが  
……

「なあ、ルーミア」

「何？」

「これ、恥ずかしいんだが」

俺はルーミアに掴まれている手を見る

「貴方が空を飛べないから仕方がないでしょ」

そう、ルーミアの言う通り俺は空を飛べない。というか、どういう風に気を使えば飛べるのか解らないと言うのが正しいだろうか

「目的地に着いたら、飛び方を教えてあげるから今回は我慢して」

「了解………ところでルーミア」

「次は何？」

「あれは何だ？」

俺が指差した先には、空を飛ぶでっかい何かがいた

「龍だけど？貴方も何回も見てるでしょ？」

「いや、俺がマグマに飛び込む前にはあんな馬鹿でかい奴はいてなかったぞ」

「貴方マグマに飛び込んだの！？」

俺の発言に驚くルーミア

「あれ？その事は知らないのか」

「貴方の事が全て解る訳じゃないって言ったでしょ……」

馬鹿を見る様な目で見られた

「まあ、それは良いとして、あの龍こっちに向かって来てるぞ」

龍は口を大きく開いてこっちに……口を開いて！？

「ルーミア避ける！」

「言われなくてもかわすわよ！」



ルーミアが返事をするよりも早く、高速で景色が横に流れていた  
すぐ横を全長150mはありそんな龍の巨体が通り過ぎた

「ルーミア、あの龍倒せるか？」

「無茶言わないで、いくら幼い龍でも、夜ならともかく昼間は無理  
よ。」

「あれで幼いのかよ……まあいい、無理なら離れとけ、俺があの  
龍を倒す」

「勝てるの？」

心配してくれているのかそんな事を聞いてくるルーミア

「俺の実力を見せるいい機会だ……あまりの強さに惚れるかもな」

「ふふ……なら、惚れさせる程の強さを見せてもらおうかしら？」

会話を終え、ルーミアに地上へ降ろしてもらい、ルーミアは避難した

『話は終わったか？』

いきなり頭の中に声が響き、後ろを見ると龍が待ち構えていた

「待たせたみたいだな」

『なに、私が喰らうのはお前だけだからな、あの娘を喰らう訳には  
いかんから、離れてくれるに越した事はない』

「何で俺を喰らおうとするかは分かんが、戦いといきますか」

『お前が喰らわれる事が決着の一方的な蹂躪にすぎんがな』

こいつム力つくな

「よし、お前が降参しようと殴り続けるからな、覚悟しろ」

『人間ごときが調子にのるな!』

龍が襲い掛かってき、戦いの火蓋が切られた

戦いは龍が言っていた通り、一方的なものとなっていた

『貴様……………本当に人間か……………?』

ただ、龍が言ったものとは立場が逆である事を除けばだが

「俺は人間だよ……………それ以上でも以下でもない」

龍がまた飛び込んで来るが、それを難無く横に躲し、胴体部分を蹴

り飛ばす

「何度繰り返しても無駄だって、お前は体がでかい分威力はあるが、速さが足りない」

すぐさま龍が尻尾で薙ぎ払ってくるが

「尤も、その威力さえ俺の力に勝てんが……な！」

その尻尾を真正面から殴り飛ばす……流石に体が軋むが、動けない程じゃない

『なら、燃え尽きろ！』

龍が雄叫びをあげながら、火を吐いてきた

俺はとっさに息を止め、目を閉じ、体を丸める

数秒間火で炙られるが、マグマでも火傷を負わない体なので、数秒程度の火じゃ少し火傷する程度でしかない

『火もほとんど効果なし、か……私を殺せ、既に勝ち目は無い』

「別に喰おうとしなけりゃ殺す気は無いんだけど」

『それは無理だ。あの方の命令に逆らう事は出来ない』

「仕方がないか……なら、死んでもらう」

そう言って拳を振り下ろすと

『そこまですてもらおう、懐かしき者』

別の声が頭に響き、腕を掴んで止められた

龍……二人目？前編（後書き）

仕事が忙しく、なかなか時間がありませんが、頑張つて出来る限り早く更新していくので、見捨てないで頂けるとありがたいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9921j/>

---

強くてニューゲーム

2010年10月14日12時10分発行